

正正体

甲 「私は、ご本願一つでお助けくださるのだと聞いて、お念仏をよろこばしていただいています。どうも心の底に、何だか妙なものがあります。これでよろしゅうございますか。」

乙 「そんなぐうたらな聞き方をはじめてから、いやよろこびはじめてから、何年くらいになりますか。」

甲 「はい、かれこれ十四五年になります。いつこうつまりませんので。」

乙 「何がそんなにありがたいのですか。」

甲 「はい、死にさえすれば、お浄土へまいらせてもらうことです。」

乙 「ワツハハハ………だいぶん間がぬけておかしいところを喜んでいますね。ひとつ死んでみたらどうです。」

甲 「それが死ぬるとなると、ひよつと違いはしないかと思ひますので………」

乙 「それにありがたいのですか。何のことです。」

甲 「いけませんか。」

乙 「自分のことを他人に問うものがありますか。あなたはさつきご近所のお稲荷さんの信仰を笑っていました。あなたはそれ以上の我欲家ですわい。『どうも』が残っているのも無理はありません。あなたのは『信』ではなくてまつたくの我欲ですわい。」

甲 「どうか間違いなくまいますように言つてください。」

乙 「いつまでも何を言っているのです。それがあなたの我慢です。それではあなたが考えているような地獄も浄土もないと言つてあげましょう。」

甲 「やれやれさようでございましたか。それならまことに私どもの長男が申しますように、お坊さんが勝手に地獄だ極楽だと言つて人を治める道具に言われた方便でございしましたか。それで安心いたしました。」

乙 「そうなりと思つていなさい。」

甲 「それで楽になりました、おいとまいたします。」

乙 「それごらん、儲けがなくなると帰つて行くでしょう。あなたには信仰などいらなかつたのですわい。さつきとお帰りなさい。」

甲 「えッ………」